

説教 『見抜かれている救い』 山本 護 牧師  
聖書 エレミヤ書7：4～6／使徒言行録5：1～11

神を欺いて死んだアナニア・サフィラ夫妻(使徒 5:5,10)、初代教会の状況を鑑みれば彼らは希少な信徒だった。まことに印象的な事件ゆえ、よく知られた箇所だが、私はここからの説教を避けて来た。その理由は三つ。一つは、きちんと正直に献金せよと暗に言っているようで誤解されたら困るな、という心配。二つは、彼らくらいのイジマシサは普通で、自分にもこうしたところがある、という恐れ。三つは、裁きがあまりに厳しくて救いが無いではないか、という聖書の浅はかな読み。しかし今回、この聖書箇所から逃れられなかった。度量が狭い私の心配・恐れ・読みで、「神の御言葉」を隅に追いやっていたとは、なんと身勝手だったか。私を整えるはずの枠組に、閉じ込められていたらしい。

ごく初期の教会共同体はいわば原始共産性で、「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである(4:34~35)」。アナニアとサフィラもそうした空気の中で、土地を売った金の一部を「全額です」と偽って献げた(5:1~2)。献金の仕方は各自が決めることで強制や報告義務などなかったのだが(5:4)、うしろめたさと褒められたいがない交ぜになって、ついセコイことになった。人間の悲哀と滑稽を含んだいかにもありそうな喜悲劇だが、その結果は「死」。それにしても、この程度のことが死に値するのか。彼らのイジマシサは、そんなに罪深いことなのだろうか。

アナニアとサフィラは聖霊を欺き(5:3)、神を欺いた(5:4)。これが彼らの悪だ。それではその懲罰として「死」を被ったのか。決してそうではない。ペトロは彼を非難したが(5:3~4)、それだけだ。むしろアナニアが自ら「滅び」を選び取ったのではないか。

「自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取る(ガラテヤ 6:8)」。神に向けるべき栄光を、「己が肉」に向けさせようとして滅んだ夫アナニア。妻サフィラも、悔い改めの機会を与えられながら(使徒 5:8)、「己が肉」に蒔いて自ら「滅び」を選んだ。信仰的な決断はあくまでも自己決定によるもので、他者が手出し口出しできない厳しさがある。それゆえキリストに従うことは、徹底して「自由」だとも言える。

誰もが隠したい所、自分でさえ見たくない所がある。それはいたしかたないし、人間の罪や偏りを知っているがゆえの現実的な対処ではないか。サタンは多くの場合、見える悪にではなく、見えない隠された所に忍び込む(5:3)。サタンが支配的だと善良に見えるから、あの人は善人か悪人かという見極めは正確ではない。

キリスト者が隠したい所にもサタンはやって来る。しかし聖霊を欺くことはできない。サタンを迎え入れた私として、罪人の私として、聖霊に見抜かれている。すなわち、このことが救いなのだ。それを自覚する私たちは、聖霊を欺くことなく、聖霊にこそ種を蒔く(ガラテヤ 6:8)。

「主の神殿～むなしい言葉に寄り頼んではならない(エレミヤ 7:4)」。人から褒められようとして神を讃美し、「自ら災いを招いてはならない(7:6)」。神を讃美するとは、明るみでの手柄ではなく、隠れた所での誠実(7:5~6)。やがて、誰の手によるものか分からない、信仰の痕跡だけが静かに遺されていく。



《おまけのひとこと》

解き放たれることも 滅びることも 神の業は 私の答えを待つて為される キリストは「おまえさんはそれでいいのかい」と念を押し もはや誰も手出しできない 私への徹底した 厳しい自由